大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No.61

経塚・経筒（古野遺跡第４次調査）

大野城市教育委員会

写真１　経筒

写真２　経塚から背振山系を望む

大野城市乙金にある古野遺跡では経塚が発見され、中から経筒が出土しました。古野遺跡は乙金山麓の丘陵上にあり、乙金宝満神社の周辺（大野城市乙金２・３丁目一帯）に広がる遺跡です。経塚は丘の上の見晴らしが良い場所に造られており、経塚発見地からは西側に展望が開けているため背振山系が一望できます（写真２）。

【経塚とは】 経塚とは仏教の経典を土の中に納めた遺跡のことで、多くは神社や寺院の境内、丘の上や山頂・山腹に造られています。経塚造営の本来的な目的は、末法の世（お釈迦様の死後、仏の教えが伝わらなくなる時代）に経典を残すということに意味がありました。

【経筒とは】 経筒は経巻を納めるための容器で、陶器製・青銅製・滑石製などがあります。

【古野遺跡発見の経塚・経筒】 経塚はやや大きめの穴（長さ2.1m、幅1.55m、深さ0.3 ～ 0.4m）の中に、小さな穴（直径0.6m、深さ0.35m）を掘り、その中に石室（小さな石の部屋）を設けて経筒を納めていました。石室の内外には防湿材と考えられる木炭を詰めており、天井は粘土で覆っていたようです（写真３）。

経筒は青銅製で、高さ約25cm、直径約10cmの鋳造品（型に銅を流し込みつくったもの）です。銅の質は非常に良く、全く欠けておらず、当時の状態を留めています。宝珠形のつまみがつく蓋がついており、経筒の底は鏡を転用した鏡底といわれるものです。経筒の型式は四王寺山をはじめ大宰府地域を中心に分布する「四王寺型」に分類され、12世紀前半代（平安時代の終わり頃）に製作されたものと考えられます（写真１）。

写真３　経筒の出土状況

【経筒内に残る経巻】　発見当時、経筒は錆のため蓋と身が接着しており、内部の状況がわかりませんでしたが、文化財専用のX線CTスキャナにより内部の様子を撮影したところ、経巻が10巻納められていることが判明しました（写真４・５）。経巻とは仏教の経典を紙に書き写した紙本経（お経）を巻物にしたもので、一般的には８巻ないし10巻からなり、多くは法華経が写経されています。

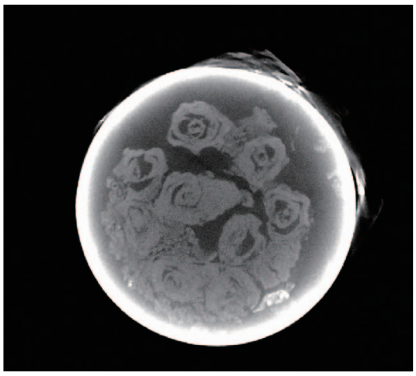

写真４　経筒内のCT画像１

【古野遺跡発見の経塚・経筒の歴史的価値】

経塚は開発による偶然の発見や盗掘を受けていることが多く、今回のように正式な発掘調査により構造や形態が明確に判明した点で学術的に貴重で、銅製経筒は美術的価値が高いだけでなく、未開封の状態で内部には紙本経と考えられる内容物が確認された点でも重要であり、遺構・遺物ともに第１級の資料といえるでしょう。

写真５　経筒内のCT画像２

ところで、乙金地区では12世紀後半（平安時代の終わり）頃から集落が広範囲に展開することがわかっており、この時期に大規模な開発があったと考えられます。経塚の造営は、この大規模開発の「きっかけ」となるような大きなイベントだったのかもしれません。

経塚・経筒はタイムカプセルのようなもので、当時の人が未来の人々に願いを託し、大地に納めたものです。現代という時代は、相次ぐ大規模災害や地球規模での環境問題、民族間での紛争をはじめ、多くの課題を抱えており、ある意味では「末法の時代」といえるかもしれません。我々は未来に何を伝え、何を残していくべきなのでしょうか。